

令和 6 年 10 月 1 日現在

機関番号：13301

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2018～2023

課題番号：17KK0024

研究課題名（和文）冷戦下東アジアにおける都市の対立と依存に関する歴史研究 平壤とソウルの空間変容史

研究課題名（英文）Research on Competitive and Mutually Dependent Relationships Between Cities in East Asia During the Cold War: The History of Pyongyang and Seoul's Spatial Transformation

研究代表者

谷川 竜一（Tanigawa, Ryuichi）

金沢大学・新学術創成研究機構・准教授

研究者番号：10396913

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,600,000円

渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて研究代表者と共同研究者らは、平壤とソウルの都市史を、日本植民地支配の過去や東西両陣営からの国際援助、そして韓国・北朝鮮のそれぞれのナショナリズムなどと連関させてより深く理解することができたとともに、そこを足場に多くの学術論文や研究発表を行うことができた。また、それを通じて、日本・韓国・北朝鮮を主眼に据えた東アジア都市・建築史研究の共同研究基盤を、代表者を中心に作ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において政治・思想的な視点で語られがちであった平壤の歴史を東アジアに開き、国際関係の下で立体的に理解するための学術的貢献を行うことができた。特に日本植民地支配との関係や冷戦下の国際関係、そして韓国・北朝鮮関係のなかでソウルや平壤の歴史の理解を進めたことで、広い意味で日韓朝を議論するために必要な学術知やそのプラットフォームの構築に寄与することができた。また、本研究で培った共同研究ネットワークを足場にして、その成果を他の研究者や学生などに還元していくことで、研究の社会的意義もまた獲得できた。

研究成果の概要（英文）：Through this research, the principal investigator and co-investigators were able to gain a deeper understanding of the history of Pyongyang and Seoul in relation to the past of Japanese colonial rule, international aid from the East and the West, and the nationalism of both South and North Korea, as well as to publish many academic papers and research papers based on this understanding. Through this process, we were able to create a foundation for joint research on the history of East Asian cities and architecture, with a focus on Japan, South Korea, and North Korea, centering on the project's principal investigator.

研究分野：建築史

キーワード：北朝鮮 ポストコロニアル 脱植民地化 冷戦 植民地

1. 研究開始当初の背景

日本において、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）は不可解な国として理解されるようになって久しい。そうしたなかで、都市や建築もそこに潜む深い歴史を知られることなく、パイアスのかかった観点をもとに、始めから特殊なものとして議論されることが多い。同国が日本の植民地支配を受けていたということも意識されることはほとんどなく、もっぱら朝鮮戦争後に建設されたモニュメンタルな建築や、高層のアパートが取り上げられる。他方で大韓民国（以下、韓国）については、朝鮮戦争後の建築が何らかの特徴あるものとして取り上げられることは日本では稀だ。しかし北朝鮮と違って植民地支配の記憶は周期的に掘り起こされ、日韓の間の火だねとなってきた。建築史分野でのそのクライマックスは、1995年の朝鮮総督府庁舎の解体であったが、近年は徴用工などの問題が焦点化されることとなり、物理的な痕跡よりも、経済や政治的な問題に関心が強まってきた。こうした対照的な状況も相まって、日本から見た時に北朝鮮と韓国の都市や建築を架橋しうる認識枠組みは、そもそもその基礎的理解も含めて構築できていないというのが実情であった。朝鮮半島では1950年から始まった3年間に及ぶ朝鮮戦争で、互いが東西両陣営に分かれて戦った上、そこに長く前線が築かれ、北と南に分かれて全く異なるように見える政治体制の下、歴史が積み重ねられてきた。この結果、日本でも別々の認識枠組みが固定化し、それをもとにそれぞれの国の都市や建築を見る目ができあがってしまったと思われる。

しかしそうした構図は、日朝、日韓の関係においても同じかもしれない。建築が「作品」として個別に議論されることはあっても、地域研究として、あるいは国際関係史として同じ俎上で語られる機会がないのだ。それは日朝韓三国がコミュニケーションするための共通のプラットフォームを、建築という分野が十分に提供してこなかったことを物語っていよう。

朝鮮半島には、20世紀初めから始まった日本植民地支配とその下での「近代化」の記憶が積み重なっているのであり、そうした過去との関係の下で解放後の両国の歴史が始まっていた。また解放後は、北朝鮮はソ連を始めとする東側諸国と、韓国はアメリカや日本を始めとする西側諸国と、それぞれ関係を持ちつつ国家建設が進められてきた。しかも、朝鮮戦争の復興が一息つく1960年前後になると、北朝鮮は「地上の楽園」と喧伝されて国際的プレゼンスを高めたし、反対に韓国は軍事政権の下で1970年前後に「漢江の奇跡」を進めて一気に高度成長を遂げていった。そこにおいて両者は互いに牽制しつつも、同時に意識し合い、時に苦難の行軍やIMFの介入などの国家的な試練を経て、現代にまで国を守り続けて来た。こうした20世紀の歴史がほとんど意識されずに都市や建築が「理解」されているというのが、本研究を立案した際の建築史分野を足場とした研究代表者の問題意識であった。こうした多様な関係の下で成立した歴史を抜きに、現状の社会空間は理解できないはずだ。

そしてさらに言えば、20世紀前半において朝鮮半島に対して植民地支配を強いた日本は、常に歴史を意識して両国と構える倫理的責務があり、その過去を総括しながら関係を不断に刷新していく姿勢が求められる。物理的な都市空間や建築物は、私たち自身の社会を直接的に支持・構成するものであり、それに対するお互いの理解を深めることは、相互に融和的な方向へと社会を導くための基礎・基盤となるはずだ。以上のような背景と問題意識の下で、本研究を立案することとなった。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような問題意識を背景にして設計されたものである。その際、学術研究活動の推進と、それによる国際共同研究基盤の構築という二つの枠組みを、本研究課題の両輪とした。

前者の枠組みでは、対象都市は平壤とソウルに絞ることで、研究のタイトルを「冷戦下東アジアにおける都市の対立と依存に関する歴史研究 平壤とソウルの空間変容史」とした。冷戦下の平壤とソウルが対立を前提とする依存関係のもとで都市空間を変容させてきたと捉え、その相関メカニズムを建築・都市史研究として解明することが第一の目的である。当然、そこに共通する重要なファクターとして日本植民地支配の影響を解明することもまた目的とした。最終的には、その理解の上で冷戦下の東アジア都市を展望・分析しうる史的理論の構築も念頭に置いた。

後者の枠組みでは、学術研究を通じて都市や建築に潜在する多国間関係を見出すだけでなく、本研究の持つ問題意識まで含めて共有しつつ共同で研究する国際研究基盤を日韓で構築したいと考えた。そのため、都市・建築史だけでなく、社会学や政治学、文学など幅広い専門家たちと研究ネットワークを構築し、柔軟に課題に対応できる学際融合的な研究体制を構築することを目的とした。

3. 研究の方法

上で述べた目的に対して、それを達成していくために目的をより構造化された複数の個別のテーマへと分解した。また、研究代表者が2018年10月から2019年9月まで一年間韓国のソウルにある漢陽大学・建築学部の韓東洙研究室に滞在し、複数のテーマを同研究室に当時所属していた徐東千副教授とともに推進することとした。

具体的には、平壤とソウルの「解放以前の両都市の都市基盤構造の比較分析」、「ロシアおよび東欧諸国の調査をもとにした旧東側諸国都市と平壤の復興過程の比較分析」、「旧西側諸国のソ

ウル都市開発援助に関する資料分析」、「平壤とソウルにおける記念碑的建築群の考察」、「都市内の社会基盤施設の建設による都市空間変容」を作業の骨子として開始することとした。

滞在の後は共同研究で培ったネットワークを活性化させたまま持続させ、日本で国際シンポジウムや共同調査などを繰り返しつつ研究を進める計画であった。

また、共同研究者だけでなく、当時モスクワ経済大学の美術史の教員であったアンナ・ゲーゼワ女史や、代表者と研究交流蓄積のあった同志社大学や高麗大学の教員らと適宜連絡を取って研究を支えて頂くとともに、そのネットワークを生かして漢陽大学や高麗大学、同志社大学や研究代表者の所属先である金沢大学で研究会を開催することとした。

以上のような方法で研究を開始したが、2020年よりコロナ禍が始まり、共同研究はその時点で急ブレーキがかかった。ただし、幸いにもすでに韓国滞在を終えており、そこからはインターネットなどによる間接的なコミュニケーションを駆使して共同研究を進めるとともに、感染状況の波をうまく読みながら共同研究者の招聘や国際シンポジウムの開催などを進めた。結果的に、本研究で構築した共同研究基盤を壊すことなく研究を推進させることができた。2022年以降は研究内容の深化・刷新を続けながらも、同時に成果の国際発信や多角的な研究ネットワークの構築に重点を置くこととし、コロナ禍で失われた研究・交流機会などを回復しつつ、論文発表やシンポジウムなどに努めることとした。

4. 研究成果

本研究の最も大きな成果は、韓国・漢陽大学の韓東洙教授や現在・木浦大学の徐東千助教授との共同研究基盤の形成と、それを軸に非常に広い分野にわたって 例えば文学分野の研究者とも研究交流を行い、共同で査読論文集に特集を組むほど 大切に展開できたことである。

そして、そうした研究者らに支えられた研究基盤に立って研究を進めることができたことで、都市・建築・社会基盤(土木)分野から、平壤とソウルについての研究を多角的に発信することができた。同時に、かなり多くの研究資料を収集することができ、その研究基盤も含めて本研究期間内で終わらない将来的な研究資源を手にすることができたと考えている。

学術的な成果内容についても、平壤とソウルの都市計画史の分析や国際援助比較などを、具体的な建築や社会基盤施設を通じて考察することができた。特に平壤の改変にも携わった金日成総合大学で教鞭をとった建築人材たちの分析や、平壤の普通江改修工事の実体解明などでは、世界に先駆けて発見した極めて貴重な新資料なども用い、共同研究をベースに査読論文を複数執筆・掲載してきた。多くの論文や研究発表、研究セミナーの開催などを行ってきたが、そうしたなかでも上記のテーマで査読論文に掲載した研究が、個別の学術成果としてはハイライトとなる成果だったと考えている。以上、研究期間は2023年度で終了したが、最終年度で収穫・考察した内容なども用いながら、今後も研究成果を発信していく予定である。

最後に、研究やその周辺で私を支えてくださった方々はあまりにも多く、ここでは書き切れないが、特に、いま感謝の言葉を届けることができない人々に、謝辞を記載しておきたい。なかには調査で出会った一期一会とも呼べるような人々や、個人的に連絡を取ることができない北朝鮮の人々もまた含まれている。また、巷間メディアを賑わせているように、研究者らの研究時間は圧迫されており、どの研究者も生活の貴重な時間を削ってその時間を研究にあてるということが常態化している。研究を行う足場自体が危うくなっており、そうしたなかで本研究だけでなく学術組織や学術界自体を支えて下さっている方々にも厚く御礼申し上げる。さらに、本課題の研究費については基金化されていたことに加え、柔軟に期間を設定させていただいたことで、目先の課題に惑わされることなく、研究者として長期的に役立つ活動や目的に注入することができた。そうした点でも、制度設計や運営に関わった方に感謝をお伝えしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 谷川 竜一	4. 巻 52
2. 論文標題 1946年平壤・普通江改修工事の再検討：「突撃」という脱植民地化の技法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科学 = The Social Science(The Social Sciences)	6. 最初と最後の頁 3～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00029424	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷川竜一	4. 巻 77号
2. 論文標題 書評論文「市川紘司著『天安門広場 中国国民広場の空間史』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『建築史学』	6. 最初と最後の頁 182-195頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ryuichi Tanigawa, Dongchun Seo	4. 巻 Vo.4, Issue 1
2. 論文標題 Architecture teachers during the early days of North Korea: Between liberation from Japanese colonial rule and the establishment of a socialist state	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Architectural Review	6. 最初と最後の頁 155-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 谷川竜一、徐東千	4. 巻 第85巻、第770号
2. 論文標題 北朝鮮の草創期建築教員たち - 日本植民地支配からの解放と社会主義体制構築のはざままで -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 943-953
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.85.943	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 谷川竜一	4. 巻 1161号
2. 論文標題 1958年、平壤・青年通りにアパートが建つ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 38-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ryuichi Tanigawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Discussing Cultural Heritages from East Asian History in the 20th century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Korea national University of Cultural Heritage, The 2018 International Conference for the UNESCO CHAIR, National Palace Museum of Korea	6. 最初と最後の頁 115-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 普通江改修工事の歴史的意義 植民地期との連続と断絶をめぐって
3. 学会等名 平壤・普通江改修工事（1946年）をめぐる歴史的・文学史的研究
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 平壤の脱植民地化と普通江改修工事（韓国後）
3. 学会等名 2023韓日 平壤学シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 アジアにおける日本の巨大水力発電開発史 帝国をつくりだす「技術」
3. 学会等名 応用物理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 アメリカ・日本・北朝鮮を繋ぐ水をめぐる技術 植民地開発から考えるエネルギーと都市の20 世紀
3. 学会等名 国際セミナー『近代建築史の境界を超えて』
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 解放直後の平壤の都市開発 「普通江改修工事に突撃せよ！」
3. 学会等名 国際セミナー「敗戦、解放、そして勝利のなかの建築 20世紀半ばの東アジア動乱期を照らし出す」（国際共同研究強化加速基金【代表・谷川竜一）主催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 徐東千
2. 発表標題 韓国解放前後の建築家と建築教育
3. 学会等名 国際セミナー「敗戦、解放、そして勝利のなかの建築 20世紀半ばの東アジア動乱期を照らし出す」（国際共同研究強化加速基金【代表・谷川竜一）主催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 朝鮮の植民地支配と公使館、統監邸、総督官邸
3. 学会等名 『建築・都市から考える1900年前後の東アジア』国際研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 20世紀東アジアの都市・建築に潜在するポスト・コロニアルな力学 北朝鮮の都市住宅建設を中心に
3. 学会等名 国際文化資源学研究中心研究発表会（第4回Web研究会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 解放後平壤の拡大と住居空間（韓国語）
3. 学会等名 高麗大専校・文化遺産国際セミナー（鄭炳旭）、高麗大専校主催
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 平壤青年通り周辺のアパートの歴史的意味（韓国語）
3. 学会等名 漢陽大学・東アジア建築・都市国際コロキウム、漢陽大専校主催
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 1945年以後の平壤 日本人の引き揚げと朝鮮人の都市建設（韓国語）
3. 学会等名 漢陽大学・東アジア建築・都市国際コロキウム、漢陽大学校主催
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 平壤新市街における引き揚げと接収 「日本人街」はどのように利用・再編されたのか
3. 学会等名 同志社大・人文研・第6部門研究・第2回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuichi Tanigawa
2. 発表標題 Discussing Cultural Heritages from East Asian History in the 20th century
3. 学会等名 Sustainable Conservation of Asia-Pacific Cultural heritage, Korea national University of Cultural Heritage, The 2018 International Conference for the UNESCO CHAIR (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ryuichi Tanigawa
2. 発表標題 Discussing Cultural Heritages from East Asian History in the 20th century
3. 学会等名 Sustainable Conservation of Asia-Pacific Cultural heritage, Korea national University of Cultural Heritage, The 2018 International Conference for the UNESCO CHAIR (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	韓 東洙 (Han Dongsu)	漢陽大学・建築学部・教授	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	徐 東千 (Seo Dongchun)	木浦大学・工学部・助教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 敗戦、解放、そして勝利のなかの建築 20世紀半ばの東アジア動乱期を照らし出す	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 近代建築史の境界を超えて	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	漢陽大学			
韓国	木浦大学			